

「おもしろいアイテムだから……知りあいの魔法アイテム評論家に見せてみよう。うまいけば、『魔女・魔術師名鑑』に、おまえの名前がのるかもしれない」

「ほ、ほんとうですか！」

偉大な魔女と魔術師だけがのることが出来る『魔女・魔術師名鑑』。そこに名前がならばことは、わかい魔女、魔術師のあこがれだ。

「つぎから気をつけてくれればいい」

そういって、アルはそとへでていった。ポブルもあわてて追いかける。ドアにカギをかけて、『昼休憩中』の看板をかけておいた。

ポブルがそとにでると、アルは魔法をつかうところだった。

「わたしの名前はノーラ・シロ。『銀狼のノーラ』とよぶやつもいるな。王家親衛隊の隊長をやっている」

ミミ先生は、ほほえんだ。

「よい質問ですね。目には見えませんが、何千、何万といった魔力の流れが、この大地には存在します。その流れは、血液がからだ中をめぐって心臓で合流するように、世界中をまわり、『光とあわの国』で合流するのです」

それがあふれる魔力の答えだ。

「正確にいうと、『光とあわの国』の聖アルベス山の頂上です。この山には、魔力の川ができるほど、強大な魔力の流れがあります。その壮大な光景は『すばらしい』のひとつことですよ」

ミミ先生は手帳に、ミーコさまが「光とあわの国」をおとすれたときに注意することをメモした。

「さて、つぎはこの国だけに生息する、ドラゴンについて勉強しましょう」

それはラルガスからわたされた仮面だった。

『おまえはこのさき、けっしてあきらめないと誓えるか？』

ポブルはラルガスのことばを思い出した。そう、ここでポブルがあきらめてしまえば、ミーコやヒウトラたちまでやられてしまう。

ナナがきいた。

「大聖堂でおまえの実力を知ったときだ。『国中さがしてもいない』、『おれの正体を知っている』、『おれとおなじくらい強い』。これだけヒントがあるのに、気づかないわけがあるか」